滋賀大学
教育学部

試験で配付する問題冊子はＢ４判です。

014

令和７年度一般推薦入学試験問題

専門課題　小論文
（初等教育コース教育文化専攻）

〔注　意〕

1．監督者の指示があるまで，この冊子を開いてはいけません。
2．監督者の指示に従って，解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。
3．この冊子は問題用紙２枚と下書き用紙１枚です。この冊子と別の解答用紙は１枚です。印刷の不鮮明な箇所などがあれば申し出てください。
4．解答は解答用紙の指定された場所に記入してください。
5．解答に字数制限がある場合には，句読点をすべて字数に数えます。
6．この冊子は持ち帰ってください。

令和７年度一般推薦　専門課題　小論文　　問題用紙１
（初等教育コース教育文化専攻）

問題　以下の文章を読んで、次の問いに答えなさい。

(1) 文章の下線部「教師がファシリテーターとしてのみ存在し、それ以外では自律的な学習プロセスだけがあるというような転換」とは、どのような意味か。300字以内で具体的に説明しなさい。

(2) これからの教育において、この文章がいうところの「教えること」はどうあるべきか。400字以上600字以内であなたの考えを論じなさい。

ロボット掃除機についてまず興味深いのは、部屋に掃除機をかけるという自らの仕事を、自律的に自分自身で実際に行うことができる点である。だが、おそらくもっと興味深いのは、ロボット掃除機を何度も使っているうちに、より効率的に仕事ができるようになることである。というのも、ロボット掃除機は、自分が仕事をする特定の部屋に対して――知的に――適応することができるからである。もしロボットが仕事をするパターンが、最初はむしろ行き当たりばったりであるか、あるいはもっと正確には、それらがプログラムされた特定のアルゴリズムによって動いている場合でも、何度も使っているとロボットが働く環境に合わせて適応するようになる。したがって、ロボット掃除機は学習することができるのであり、あるいはもしそう言いたければ、環境に合わせて知的な方法で適応することができるのである。ロボット掃除機は外部からのいかなる介入もなく掃除をすることができる点で、ロボット掃除機の学習は自律的なものである。しかし、このことは、ロボット掃除機の学習が外部から影響を受けることがないということを意味するのではない。ロボット掃除機が外部からの影響を取り込み、もっと多くの異なる事柄を学習するには、ロボットを異なる環境に置くことによって、異なる環境条件に適応させる必要がある。一定の範囲の異なる部屋に適応したロボット掃除機は、自分自身を適応させる仕事をし、ロボットが配置されたどんな新しい環境にも適応する仕事をより効率的に行うようになると言うこともできるだろう。ロボット掃除機の学習は生涯にわたる仕事である。〔ロボット掃除機を取り巻く〕それぞれの新たな状況が新たな課題を提示し、より多くの知的な適応を要求する一方で、ロボットは新たな状況に適応することに、より熟練され、効率的になるかもしれない。

ここまでのロボット掃除機の説明は、現在、普及している教育のイメージの一つ、あるいはおそらくそれ自体についてかなり正確に描き出していると信じている。これは、教育を学習者中心の試みとして捉えるイメージである。そこでは、究極的には学習者が自らの理解を構成し、自らのスキルを形成するのであり、そうしたプロセスが生じるように配置を提供するのが教師の主な仕事になる。このような状況では、教師は実際に何も伝達することはしないが、その代わりに生徒の学習を促進するために彼らの学習環境をデザインすることになる。同じように、生徒は受動的な知識の吸収ではなく、能動的に適応し構成することにかかわるようになる。そして、このことをとおして、生徒は将来のさまざまな状況にうまく適応するようなスキルとコンピテンスを獲得するのである。これはまた、カリキュラムの意味と位置づけを変更させる。カリキュラムというのは、もはや伝達され獲得されたコンテンツとして存在するのではなく、もっと柔軟かつ個別化された方法で、生徒が自分に合った独自の学習履歴を追求する「学習機会」のセットとして再定義されるようになる。

（中略）

私は、この章を伝統的な教授へのあまりに一般的で皮相的な批判――その批判は現代の教育思想の新たなドグマとなったかのように思われる――に対する批判的な問いから始めた。私は、この批判がどのようにして教えることと教師の消滅と、学習への転換を導いていったのかを示した。それは、<u>教師がファシリテーターとしてのみ存在し、それ以外では自律的な学習プロセスだけがあるというような転換</u>である。教師は、「壇上にいる賢人」から「〔学習者の〕傍らにいる支援者」になり、そしてある人たちによれば、「〔学習者の〕後ろにいる仲間」にさえなってしまったように思われる。学習への転換が生じた理由は、「伝統的な」教授が統制の行為として理解されたことにあるように考えられる。

（中略）

（問題用紙２に続く）

（問題用紙１から続く）

しかし、この章で示された考えから生じるのは次のことである。すなわち、統制としての教授という考えに対する応答として提唱される選択は学習の考え方であり、具体的に言えば、意味形成や意味作用としての学習の考え方であるが、それは意味作用の行為において、学習者が主体として現れることができない点で同じ問題に直面するということである。なぜそうであるのかを理解する一つの方法は、意味作用の行為が自己から発し――私が述べてきたように、世界を「経由して」――、自己へと回帰することと関係している。意味作用は、中断されることがなく、いつもすでに自己とともにあり、それ自体で充足する点で、自己を自己のうちにとどめるものである。このことに目を向けるもう一つの方法は、つねに変化する周囲の条件に適応し順応する現在進行中の試みにおいて、自己が適応しようとする環境に相対する客体のままであり続けると主張することである。そのような創造的な適応の行為は自己が生存するのを助けるかもしれないが――そして、現代の言説のかなりのものが、たとえば未知の将来の中で生き残るためのスキルの獲得の必要性といったように、生存についてであることは注目に値するが――、自己が存在する（誰かの外部に存在するという、文字どおりの意味で）可能性に帰着することはない。別の言い方をすれば、自己が適応しようとする環境が、自己が適応すべき環境であり、適応する価値のある環境であるかどうかという疑問は、けっして生じないのである。自己――順応的で適応的な自己と言うべきかもしれないが――は、何に適応するかを評価する基準を自己自身から生み出すことはできない。こうして、適応するものに対して「客体」として「捕えられる」のであり、それは私がロボット掃除機のイメージでもって明らかにしようとした問題なのである。

（中略）

これらの考えに照らすことではじめて、なぜロボット掃除機のような知的な適応システムという考えが教育関係における適切な生徒像を提供しないのかを理解することができるかもしれない。これまで述べてきたように、そのような知的な適応システムは学習することができ、環境に適応し順応することもできる。この点で、意味作用が可能だとされることになる。一方で、けっして起こりえない「事柄」、その世界でけっして「訪れる」ことのない「事柄」というのは、〈他者〉が語りかけることであり、教えられるという出来事である。そうしたシステムは、学習することができるけれども、教えられることはできないし、教えることを受容することもできないのである。

（ガート・ビースタ［上野正道監訳］『教えることの再発見』2018年、東京大学出版会　一部改変）